

# カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Chibwe Chisala  
出身地: ザンビア・ルサカ  
所属: ザンビア通商産業省  
2007年8月～2008年3月

## 初めての滞在で感じたこと

チブウェ・チサラ

日本での体験は忘れられず、しかも驚嘆させられるものであったと言える。他のアフリカの人々と同じだと思うが、学生として来日する前には、多くの驚きを期待し、全くの異文化にどのように対応すれば良いのか不安でもあった。テレビを通して見た日本の先進技術に加え、カルチャー・ショックにもきつと「歓迎される」であろうし、違った生活習慣に苦勞しながら慣れる必要もあると考えていた。

まず、食べものが私の国とは全く異なっていた。私が食べた牛肉、鶏肉、豚肉はどれも甘い味がした。そのような日本の食材に食べ慣れるには時間がかかったけれども、ここでの食べ物の多くは健康的で、しかも美味しいと後に理解できた。私が今までに滞在した国々では、健康的でエネルギーシユな年配の方々を見かけなかった。しかし、日本では周囲を見渡せばいつでも、そのような方々に出会うことは不思議ではないと言える。このことは、食べ物、日本人が実践する伝統的なスポーツによる影響ではないかと推測できるためだ。また、ここで販売されている漢方薬でさえ、日本人の長寿につながる方法で製造されているかのようでもある。

ところで私の母国では、握手をすること

が習慣となっているため、日本人に接するときはいつでもお辞儀をすることに慣れていなければならぬ。お辞儀をすることは、今となつては私の生活の一部分にもなつた。私がザンビアに戻つた場合、握手する習慣をどうすれば再び身につけることができるのだろうか。

よく言われるように、日本人には勤勉さや几帳面さが容易に感じ取れる。毎日スケジュールを管理する際、移動にどのくらいかかるかを知るために、私は乗り物の時刻表を参考にする。日本人が全速力で電車に乗りとうとする光景を見かけることがある。電車の時刻表が無いと、その日のスケジュールはめちゃくちゃになってしまうのか否かは分からないが、計画を立てることに固執する必要があるのではないか。

帰宅する際、バスの車内では誰もが物静かにしているの、こちらから話しかけなければ会話は全く始まらないであろう。たいてい読書をしたり、ゲーム機で遊んだり、忙しげに携帯電話のボタンを押し続けたり、と彼らは公共の場所での「静けさ」を楽しんでいるかのようである。それでも、彼らに話しかけると、開放的な態度で応じてくれる。私は基本的な日本語を覚える必要もあつた。そのような言葉でも、日本人とコ

ミュニケーションをしたり、買い物をしたリ、鉄道の駅で迷つてしまったときなどの助けになるからである。

当惑してしまうこともあつた。昼食やダイナーに誘われたときに、ザンビアであれば誘つた側が費用を負担することが当たり前となつている。だが日本では、男性と女性の友人どおしであっても、昼食代などの費用を均等、つまり割り勘にしてしまうようだ。

来日初期の頃、とある親しい友人に昼食に誘われた時のことであつた。食事を済ませ、昼食代を支払うことになつたときに、昼食に対し支払う必要はないと私は思ひ込んでいたため、その請求を気になかなかつた。だが、友人は財布を取り出すと、請求代金の半分のみを支払つた。そのため、残り半分は私が支払わなければならないのだ、とその場の状況からすぐに察することができた。私の財布には幸い小銭もあつたため、何とかその場でうまく振る舞い、恥ずかしい思いをせずに済んだのであつた。

さて、読者の皆さんにお話したい思い出はまだまだたくさんあるが、誌面の都合もあり、それらについては自分自身の記憶として心にとどめておきたい。

(前インタビュー生/訳 梶山貴史)